

矢野賞

お父さん、お話が見えません



東京都

折山 精

私は眼と脚に障害を持っています。そして今、東京都立の聾学校の親の会に籍を置きながら、自らが障害者として体験してきた数かずの出来ごとを教訓としてふりかえり、それを土台にして、広く障害者福祉への道で少しでも、手助けになればと活動しております。

現在私が活動の拠点としているこの聾学校親の会は、名前が示す通り、耳の聞こえない聾児たちの親の会であり、私も、全く聴力を持たない一人の男子の父親でもあるのです。障害者がまだ社会的な理解を得られていない冬の時代に生きてきた私が、こんどは自分の息子が、障害の種別が全く違いま

すが、同じように障害者として茨の道を歩まねばならないと知った時の私の悲しみと驚きようは、正しく、青天の霹靂^{へきれき}でした。

忘れもしません。昭和四十一年に生まれ、生後一年九か月にもなろうという吾が子は、そのときまだ歩行ができず、這い回っておりまして。

私は三歳の時、麻疹が眼の中に出てほとんど失明し、立って歩行することができないで、やはり家の中を這い回っていましたが、私はその時の自分の姿を思い浮かべながら、眼の前の吾が子の様子を眺めていました。

確かその日は日曜日だったと思います。母親が障子の向こう側で、かなりの物音を立てながら掃除をしているのに、吾が子は母親を求めて母親のいる場所とは逆の方向に這って行ったのです。私の脳裏に閃^{ひらめ}きが走りました。「この子は耳が聞こえない！」次の瞬間、私は飛んで行って吾が子を固く抱き締めていました。涙が、後から後から、とめどもなく流れてきてそれが吾が子の顔をすっかり濡れにしていました。「私が歩いてきた苦難の道を、可哀相に、お前もか！」そんな想いが、いつ迄も吾が子をしっかりと抱き締めたままにしていたのです。妻も異常な雰囲気を感じて傍まで来て覗き込みました。

「ねえ、どうしたの？」暫く私は返事が出来ませんでした。

「この子は…、この子は耳が聞こえないんだ」

思えば、まだこの子が母親のお腹にいた頃から、胎教とやらの教えを信じて、私の最も不得意とするクラシック音楽をこの子のために聴かせ続けていたものです。あれは一体なんだったのだろうか。また私が会社での勤務を終えて帰宅しても、一向に振り向こうとしなかった吾が子を、「物音に動じない大物だわい、こりゃあ…」などと全く滑稽な対応をしてきた自分を笑うとともに、まさか、吾が子の耳が聞こえないことなど、とても想像も及ばなかったのです。

それにしても、生後一年九か月ぐらいで、はっきり聾児と親が気付くのは、当時ではまだ珍しいことのように思いました。聾児を持つ親のほとんどがそうであるように、信じられない思いで幾つもの病院を訪れておりますが、私の場合も例外ではなく、最後に東京大学医学部附属病院で、最終の判決のような結論を受け入れたのです。

「残念ながら今の医学では治しようがありません。残された道は、教育しかありません…」

季節は二月頃だったでしょうか。病院を後にする私たちの上に雪が降っておりまして。一步一步踏みしめる足許から、積もった雪のきしむ音が聞かれ、これからの遠い寒寒と続く道程の中で、時折り吾が子が発する喃語なんごと、幽かすかに響くその子の父である私と妻の呼吸音とが、雪の中に小さな暖かい湯けむりを上げており、その様子を二人ともただ一つの、心に伝わってくるぬくもりとして、またその吐息だけが、いま生きていることの実感としてとらえながらも、しかし私も妻も黙ったまま一言も口を利きませんでした。何かいっぱい、もやもやしたものを吐き出したい気持ちがあって、しかしそれ

を口にとすると相手の張りつめている気持ちをガラスのように粉粉に打ち砕いてしまいそうで、お互いを無口にしていたのです。

どうして△聾児△が生まれたのだろうか。私のせいかもしれない、いや、高年初産婦で難産し頭部を機械で缺んだり薬品を使用したり、いろいろな手段を尽くした後に帝王切開での救出をしたのだから、或いはその過程に原因があったのかもしれない、などと、様ざまな憶測がお互いの脳裏を駆け巡っていたのです。しかし現に生まれてきている以上、もうそんな議論は虚しいことだったし、折角生をうけてこの世に生まれてきた新しい生命に対しても、申し訳がないと思ったりして、言葉にならなかったのです。

実は私たちには、もう一つの別の思いがあつて、それも大事にしなくてはならなかった。そのとき、妻は妊娠中だったのです。まず第一に妻の心の安静を図らなくてはならなかった。下手をすると、妻が自信を喪失するあまり、次の子を中絶すると言ひ出しかねなかったからです。そうでなくても、例の胎教のことなどを考えても、妊娠中の子にどんな影響が出ないとも限りません。しかし、案ずるより産むが易しとは良く言ったものです。次の子は帝王切開することもなく通常の、しかも安産で出産しました。女の子でした。おかげで、先に生まれた聾児にとっても、かけがえのない大事な妹になったのです。

八百屋の店頭で、客が気軽に損傷した果物を排除するように、障害者が社会の中でそれが当然のこ

どのように排除され、或いは隔離されていた時代の中で、私は一人の障害者として生きてきました。小学校の頃には、右眼が失明しているために酷いいじめにも遭いました。時には小石を投げつけられたり、土手から突き落とされたり、道路に落ちている馬糞を口に入れられたりもしました。障害者を取り巻く環境が次第に改善されるような気運になったのは、国連・障害者の十年の運動が始まった頃からでしょうか。私は、自らが体験したような社会環境が、今では次第に変わりつつあることを私自身が実感する迄に、吾が子が聾児と判ってからでも、かなりの時間を要しました。そしてもし、貧しい父親である私がどんなに吾が子の障害児教育に熱中しようと、やはり個人では限界があることを悟ったのです。障害を持った吾が子を、不憫だ、みつともない、などと社会から隔離しようとしてきた昔風の親の考えは間違いであり、胸を張ってその子が障害児であることを公表し、みんなの助けを求めるときではなからうか、と考えたのです。

そのためには、先ず早期に学校教育を受けさせることだと漸く心を動かししました。東京大学で知った教育相談の機関が、千葉県ちうのだいの国府台にあると聞いて妻が通うことになりました。まだ五メートル米程しか歩けないでいる聾児を背負い、そして妹が生まれると妹を背負って兄の聾児の手を引いて、教育相談に通ったのです。駅からの道程は大人の脚で十五分程度でしたが、道幅が狭く交通量が多くて非常に危険な道でした。そしてある日、遂に交通事故に遭遇してしまったのです。

三歳になって漸く歩くことの楽しみを覚えた聾児は、旺盛な自立心に駆られて母親の手を振り払う

と、警笛が鳴り響く車道へと踏み出していたのです。それは、あっという間の出来事でした。毬のように飛ばされた吾が子は、反対車線に放り出されるや、今度は、反対車線を走行してきた別の車に轢かれ、丁度幼児の腹の部分にタイヤが載ったまま、ブレーキが掛けられて停まったのです。この時、運よくバイクで走行中の警官が目撃し、両車線の通行を止めるや、まわりの運転手を動員して腹の上の車を持ち上げさせたのです。一瞬、あたりは静かになりました。そしてみんな呼吸をころして注目しました。聾児が弱弱しく泣き声をあげたのです。

みんなの間から歓声が上がりました。泣き声は、生きていることの証拠だったのです。だがすぐ近くに大きな附属病院があったのですが、診察のための申込書を出して貰わないと診察ができないということだった。いま、手がガタガタ震えている母親に、どうして字が書けるのでしょうか。妻は親戚の者が勤務する病院へとタクシーを走らせることにしました。親切な警官が白バイで先導してくれたのです。私も、勤務先へ電話を貰ったので車で駆けつけました。柔かい幼児の皮膚は片側に襲の波を作って寄せられ、ドス黒いタイヤの跡が生々しく焼き付いておりました。まさに、内臓破裂の寸前だったのです。片側の薄く引き延ばされた皮膚がオブラートの紙のように透けていました。

私が十七歳の、丁度大東亜戦争終結の翌年の夏のある日、電柱の上で三千三百ボルトの高圧電流に感電し、暫く強烈な閃光の中で焼かれ、墜落し、田舎の接骨院に担ぎ込まれた時のことを想い出しました。特に、電流が入り込んだ右腕より、出て行った右膝関節の部分の損傷が酷かった。複雑骨折し

て脚の向きを変更させ、関節の上に在る皿状の骨も幾つにも割れていました。あたりの肉は焼かれ、魚を焼いたような白い肉は出血もなく崩れ落ちかけ、奥に白い骨を覗かせているのです。この焼かれた肉は夏の熱気の中で忽ちのうちに腐敗し、多数の蛆の発生をその後暫く続けたのです。しかしなんと
いう事だろう。いま時が経って、見るも無惨な光景を吾が子の上にまた見ようとは、私は身体が震え、診察室に長くとどまっていられなかった。

幸い吾が子は、なんの後遺症もなく治りましたが、しかし教育相談の授業が中断されたために、この学校への進学の道は閉ざされてしまいました。

この事故で、私が最も気がかりになったことは、こんな大きな事故に遭遇していながら、しかもこのときすでに三歳を越えておりながら、後になって聞いても、当の本人が、全く記憶に残っていないと言うのです。どうやら記憶というメカニズムは、それを刻み込む言葉という道具が整わない限り、正常には作動しないのかもしれない、という見逃がせない事実に驚きを覚えます。聾児に対する早期教育が、いまや欠くことの出来ない重要な課題であることを、私は痛感せざるを得ません。

千葉県国府台への進学を諦めた私は、妻に相談して、聾児を巣鴨に在る大塚ろう学校の幼稚部へ通わせることにしました。もちろん、妻が常に付き添って聾児と行動をともし、何年も一緒に学んだのです。家に帰ってから夜遅くまで復習したり、学習のための道具作りに追われました。いろいろな絵本を買い求め、絵を種別に一つ一つくり抜き、それらの名前の文字とセットにしてから、妻の咽

喉に手を当てさせながら、発声と口の動きを、一つ一つ教え込んで行くのです。

耳が聞こえる児童は、幼児期に約八千位の単語を自然に習得すると言われている。それが母国語というもののなのでしょう。しかし聾児にはその母国語が無いのです。聾児は全くのゼロからの出発を、しかも教育機関に入ってから始める訳です。

言葉が聾児の中に定着するまでは、何年もただ一方通行の、虚しい反応しか返ってきません。雨垂れが石に穴をあけるような、気が遠くなる空白の時間を、母親たちは、いらいらしながら、ただ辛抱強く耐えなければいけません。この最後まで投げ出さずに頑張った母親たちが、選ばれて毎年、聴覚障害者教育福祉協会からの表彰を受けております。こうした実に涙ぐましい努力が陰にあるからこそ障害者の自立があるのです。

私はいつもそう思っています。一人の障害者を自立できるように社会へ送り出す事業は、オリンピックで国旗を掲揚させる以上の立派な、そして必要な事業であるということを強調したいのです。多くの人たちの協力が必要です。数多いコーチ陣や、施設の完備や沢山のお金も必要です。こういうことの充実こそが、文化国家であることのバロメーターになるのではないのでしょうか。

長い長い空白の時間を経過して、吾が子曜三の口から遂に言葉らしい発声が聞かれました。『アタァタン』それはお父さんという言葉なんです。この時も涙が出て止まりませんでした。この世の中には、いろいろな悩み事があります。しかしお金や医学の進歩をもってしても解決できないことがいっぱい

あるのです。不幸にしてそうした経験を経た人達だけが、一体、世の中で何が一番大事な何か、解ってくるのです。そしてそれ以外の悩みごとが、まるでどうでもよいことのように軽いものに思われてくるのです。とめどなく流した涙がそのことを教えてくれました。

その後、吾が子曜三はお陰様で順調な成長をみせ、小学部低学年では最も小柄な弱弱い子でしたが、中学部になってから体力が付き始め、全員によるマラソン大会に優勝してからは、漸く自信のよ
うなものが身に付いたようです。特に障害児の場合、体力の向上が学力の向上にも欠くことのできない要件であるように見受けられます。

曜三は都立石神井ろう学校高等部に進学、生徒会長にも選ばれました。そして本当に幸運なことに、東京都の教育庁が主催する青年の船（海上ゼミ）で中国への研修旅行に参加することができました。ここでは多くの健聴の男女と楽しく交流を持つことができて、本人の成長の上にも貴重な経験になったようです。しかし言葉の壁はいかんともし難く、手話の手ほどきをしながらの交流も、成果が今一つだったようです。聴覚障害者にとって、コミュニケーションに壁のある健聴者は、丁度私たちにとっての外国人と同じ存在なのかもしれません。しかし、健聴の青年たちにとっては、聴覚障害者の心が驚くほど純真で、喜びや悲しみや、そして感動を素直に表現し、そこに、まだ言葉の文明に汚染されていない未開の、心の原野を見るような新鮮さを感じとるようです。曜三もそんな対象の例に洩れず、その海上ゼミのお別れパーティでは、涙を出し奇声を発して泣いたとか聞いております。また、意外

な発見もありました。聴覚障害者に船酔いが無いというのです。

私はここで、もう一つの海外研修旅行について語る前に、どうしても富川哲次という人物を紹介しなくてはなりません。氏は小児麻痺の投薬で完全な中途失聴者となり、以後一切の医療と薬品を拒絶し続けた人物ですが、私と同じく自分が障害者であるという立場がそうさせるのか、特に聴覚障害児に対する想いが強く、四十六歳で独身のままこの世を去る迄、自分の利や安楽を求めず、ただひたすらに無報酬での奉仕活動をしておりました。曜三たちに英語の手話を教えたり、その手話によって吾々が国で初めての演劇を実現させたりしながら、曜三の約二か月位のアメリカ研修旅行への準備をしてくれたのです。氏が亡くなる数年ほど前のことでした。親でも及ばない熱意が続きました。氏の鋭い眼の中に、鉄のような強固な意志と説得力がありました。綿密な日程で現地での支援活動の手配を完了させ、遠路成田空港から送り出したのです。

聾の高校生の初めてのアメリカ研修旅行は、こうして見事に成功しました。再び空港へ出迎えに出た氏の顔には、喜びが溢れていました。この旅行の後日談が教育テレビで放映されましたが、自信を持った曜三の姿が、以前より逞しく大きくなったように画面で感じました。この快挙を、学校側から授業の一環として認め、支援してくれた西村昭治校長の言葉も忘れられません。

「障害児教育というのは、あらゆる機会を逃がさず、その子のためにチャレンジさせて行くことが必要です」と言って、失敗したら責任問題になりかねない海外研修旅行に、自らの保身より児童の将来

を選んでくれたのです。私は、障害児が自立して独自の道を開拓して行くためにも、こうした積極的な、敢えて泥をかぶることを厭^{いと}わぬ勇気のいる支援も、ぜひ必要だと願っております。

私は最初の頃、自分が障害者だったことから、逆に、他の障害者に接するのが堪えられなかった。苦しみが解るから切なかった。すぐに泣けてしまうのである。自分の子が世話になっていく聾学校でも、PTAの役員には決してならなかった。ところが、曜三が高等部に進学してから無理やりにPTAの会長に担ぎ出されてしまったが、それを素直に受け容れさせるような気持ちの変化も、徐々に私の中でも起きていた。かつての障害児を抱き締めて離さなかった、自らの内に閉じこもっていたあの頃から完全に脱却し、学校教育という集団指導の中での専門教育の成果を眼のあたりに見て、吾が子の成長を喜ぶとともに、これに対する恩返しのような意味での奉仕活動にと、次第に考えが変わってきたのです。曜三の妹として生まれた佳代が言った。

「お父さん、よかったね、お兄ちゃんのおかげで優しい気持ちになれて…」私は、自分の心を抉られるような思いがした。

そう言えば死んだ親父からも、身動きが取れないまま私が接骨院の暑苦しい狭い部屋で呻吟しているとき、懇懇と説教を受けた。

「お前はこれから一生、ひとさまの面倒にならなければ生きて行けないんだ。いいか。だから絶対に、喧嘩などしては駄目だよ、いいな…」発電所に勤務していた父の留守に、なまじ手伝ったつもりの事

故なのだ。

とかく障害者というと、強弱の差こそあれ意固地で頑固で我がままな側面を持っている。そのような強い気持ちを持っていなければ生きて行かないからである。しかしこの時の親父の言葉は未だに私の耳から離れない。だからこそ、それが反対に励みになって、事故の後も必死になって松葉杖を手放し、一本の杖にし、それも放棄し、例え歩行の形が崩れても、どんなに痛みを感じても貫き通しているのである。

しかし、そうした悲しいまでに、研ぎすまされた孤独な魂が、次第に体験してきた厳しさを糧にながら、きっと柔軟な優しい心として花開くのに違いありません。

敢えて平坦な道を選ばず、危険を冒して山登りに挑む人達がいる。また、自らの意志でもないのに、むりやり重荷を負わされて険しい人生を歩まなければならない人たちもいる。いずれも、たゆまない努力の積み重ねが必要だし、時にはいのちがけの緊張感を持続させねばなりません。

だが、どちらをとっても、与えられたこの険しい試練を克服できた者だけが、それを乗り越えたときの喜びを味わうことができるし、そのとき体験できた厳しい試練をも、逆に、感謝することが出来るようになるのかもしれない。

人間には、様々な生き方がある。しかしそれが一度だけの貴重な時間であることを、むしろ障害者の方が知っているのかもしれない。そして自分たちの不自由な生活や貧しさを乗り越えて、次第

に彼らは、人間にとって何が一番大事なことなのかを、本当に、ひと一倍、解ってくるのかもしれない。

私は時どき、うっかり、横を向いて曜三に話をすることがあった。すると、

「お父さん、お話が見えませんか」と叱られてしまう。「ゴメン！」とあやまる。そうだった。うっかりしていた。聴力障害者は、△話▽は聞くものだとは思っていないのである。△話▽というものは、見るものだと考えている。そんな、ほんの些細な感覚のズレを、私はこれからも大事にして行きたいと思う。

折山 精

昭和三年生まれ 聾学校親の会役員
東京都台東区

選 評

障害者が、社会の理解を得られなかった自分の時代から、胸を張って障害を公表する我が子の時代へ、筆者の歩みは、福祉の移り変わりの歴史でもある。

たんたんとした表現ながら、その中に、障害を乗り越えようとする強い意志をうかがわせる。長い人生経験の中から、厳しい試練を克服したものだけが、大きな喜びを味わうことが出来る、という教訓を得た。まさに矢野賞にふさわしい作品といえよう。

(中村好郎)